

成人愛着スタイルと排斥経験の想起がいじめ評価に及ぼす影響に関する追試研究

谷口 弘 一*

A Replication Study on the Influences of Adult Attachment Style and Recalling Rejection Experiences on Perception of Pain from Emotional Bullying

Hirokazu TANIGUCHI

Abstract

This study was replication research from Izaki, Taniguchi, & Ura's study (2013), and examined whether adult attachment style and recalling past rejection experiences have interaction effects on the perceived pain of emotional bullying at school. Participants were 87 undergraduate students, and were tested individually via a computer program. First, they completed the ECR-GO (Nakao & Kato, 2004) which assesses two dimensions of adult attachment style, anxiety and avoidance. Second, they were randomly assigned to respond to one of two sets of brief, open-ended questions about a past experience of rejection or taking a next important examination. Third, participants read a scenario involving emotional bullying at school and estimated the severity of the bullying with the Faces Pain Scale (Bieri et al., 1990). There were significant interaction effects between recalling condition and avoidance on the severity of the bullying by many classmates and by a specific student. In the exclusion condition, high avoidant participants estimated the bullying to be less severe than low avoidant participants, but in the test condition, high and low avoidant participants did not differ in the severity of the bullying.

Key words: adult attachment style, rejection experiences, emotional bullying.

*長崎大学教育学部

問題と目的

現実空間における三角形でのボール交換ゲームでは、ボールが自分に回ってこないとすぐに排斥を感じる (Williams & Sommer, 1997)。こうした結果は、仮想空間上でのボール交換ゲーム (Cyber ball game) でも同様に生じることが確認されており、排斥の程度が強くなるほど参加者のネガティブ感情や基本的欲求 (所属感、自尊心、存在意義、コントロール) に対する脅威は高くなる (Williams, Cheung, & Choi, 2000)。

Williams et al. (2000) の研究では、排斥の程度の主効果に加えて、排斥の程度と自尊心の交互作用効果も予想されていたが、そうした交互作用は見られなかった。そこで、伊崎・谷口 (2013) は、自尊心とは異なる個人差変数として成人愛着スタイル (関係不安と親密性回避) を取りあげ、排斥の程度と成人愛着スタイルの交互作用により、ネガティブ感情や基本的欲求に対する脅威が変化するかどうかを検討した。実験参加者の大学生はオンラインのボール交換ゲームである Cyber ball game (Williams, Yeager, Cheung, & Choi, 2012) を行った。このゲームは、自分を含めて合計3名でボール交換を行うもので、残り2名は架空の相手であった。参加者がボールを受け取る回数は、2つの条件で異なり、受容条件が30回中20回、排斥条件が同4回であった。ゲーム終了後、従属変数として4つの基本的欲求 (所属感、自尊心、存在意義、コントロール) に対する脅威とネガティブ感情が測定された。分析の結果、基本的欲求に対する脅威に関しては、自尊心と存在意義において、排斥の程度と親密性回避の交互作用が認められた。すなわち、受容条件において、親密性回避の高い人は親密性回避の低い人よりも自尊心と存在意義に対する脅威が高くなっていた。同様に、ネガティブ感情についても、排斥の程度と親密性回避の交互作用が認められ、受容条件において、親密性回避の高い人は、親密性回避の低い人よりもネガティブ感情が高くなっていた。親密性回避の高い人は、他人と関係を築くよりも、一人でいることを好む (e.g., Bartholomew & Horowitz, 1991)。また、彼らは、他人から感情的にも認知的にも距離をおいたり、自己の否定的側面を抑圧したりすることで (愛着の非活性方略)、自尊心を維持している (Mikulincer & Shaver, 2007)。親密性回避高群の人は、Cyber ball game に参加した見知らぬ相手とボール交換を何度も行うことで、他人の肯定的な特性・意図・関係行動に注意が向いた結果、抑圧していた自己の否定的側面が意識されるようになり、社会的自尊心や存在意義に対する脅威、さらにはネガティブ感情が高まったと考えられる。

Cyber ball game による排斥は、自分自身のネガティブ感情や脅威を高めるだけでなく、いじめなど他者が排斥されている場面に直面した際に、その事態の重大性に対する評価も高める (Nordgren, Banas, & MacDonald, 2011)。これは、自分自身が社会的苦痛を実際に経験することで、他者の経験する社会的苦痛をより正確に理解できるようになるためである。また、いじめの重大性に対する評価については、Cyber ball game による排斥の主効果のみならず、伊崎・谷口 (2013) と同様に、Cyber ball game による排斥と成人愛着スタイルの交互作用効果も確認されている (Izaki, Taniguichi, & Ura, 2013)。Izaki et al. (2013) の研究結果では、受容条件において、親密性回避の高い人は親密性回避の低い人よりも、いじめの重大性をより低く評価していた。

一般に、人は自分自身が経験した過去のネガティブな社会的出来事を思い返すことに

よっても、社会的苦痛の感情を自己生成することが可能である (Chen, Williams, Fitness, & Newton, 2008; MacDonald, 2008; Rosenblatt, Greenberg, Solomon, Pyszczynski, & Lyon, 1989)。したがって、Cyber ball game による排斥の経験と同様に、過去の排斥経験の想起も、いじめの重大性に対する評価に影響を及ぼすと考えられる。そこで、伊崎・谷口・浦 (2013) は、成人愛着スタイルと排斥経験の想起がいじめ評価に及ぼす影響を検討した。参加者の大学生は、最初に、大切な人から拒絶・拒否された経験 (排斥想起群) または、近いうちに大切なテストを受ける状況 (テスト想起群) を想起するように指示され、そのときの気持ちを簡単に記述するよう求められた。続いて、ある女の子が学校でいじめられている状況を示すシナリオを読み、その子の感情を評価するように指示された。分析の結果、想起条件と親密性回避の交互作用が認められた。すなわち、排斥想起群では親密性回避の高い人の社会的苦痛評価が親密性回避の低い人のそれよりも低くなっていた。

伊崎他 (2013) では、Cyber ball game による排斥操作を用いた場合 (e.g., Nordgern et al., 2011) に見られる主効果は見いだされなかった。彼らの研究では、各想起条件における気持ちの記述といじめのシナリオが1枚の用紙で同時に参加者に提示されていた。そのような提示方法が、想起条件の主効果の有無に何らかの影響を与えていた可能性がある。そこで、本研究では、PC 端末を用いて、各想起条件における気持ちの記述といじめのシナリオを別々に提示する条件操作を行うことで、伊崎他 (2013) の追試を行った。

方 法

実験参加者

大学生 87 名 (男子 21 名、女子 66 名) が実験に参加した。平均年齢は 18.3 歳 ($SD=.62$) であった。実験は講義時間中に情報処理教室の PC 端末を用いて一斉に実施された。

実験手続き

参加者は、PC 端末の画面上で、最初に、学生 ID と年齢を入力したあと、次の画面から、成人愛着スタイル尺度 (ECR-GO: 中尾・加藤, 2004) に 7 件法で回答した。本尺度は関係不安と親密性回避の 2 つの下位次元をもつ。関係不安得点が高いほど、他者から見捨てられるかもしれないという不安が高いことを示す。また、親密性回避得点が高いほど、他者との親密な関係を回避する傾向が高いことを示す。後述する分析では、各得点の平均値をもとに、参加者をそれぞれ高低の 2 群に分類した。

参加者は、成人愛着スタイル尺度に回答したあと、別の画面に移動し、今度は、大切な人から拒絶・拒否された経験 (排斥想起群) または、近いうちに大切なテストを受ける状況 (テスト想起群) を想起するように指示された。そして、そのときの気持ちを簡単にテキストボックスに入力するよう求められた。続いて、PC 上の画面が切り替わり、ある女の子が学校でいじめられている状況を示すシナリオが提示された。参加者はそれを読み終えたあと、次の画面に移動し、その子の感情を評価するように指示された。シナリオの具体的な内容は以下のとおりであった。

『アンナは学校で最も人気のない女の子のひとりです。彼女には、親しいクラスメイトがほとんどいません。クラスメイトの多くは、アンナが太っていることやセンスのない服を着ていることから、いじめを行っています。ロジャーは、どのクラスメイトよりも、一

番、アンナのことをいじめています。たとえば、アンナが教室内を歩いていると、ロジャーは「地震が来た！」と大きな声で叫びます。』

いじめに対する評価は、いじめによるアンナの気持ちとロジャーの行動によるアンナの気持ちの2項目について、フェイスベインスケール (Bieri, Reeve, Champion, Addicoat, & Ziegler, 1990) を用いて評価された。回答は7件法であり、得点が高いほど、被害者の社会的苦痛が大きく、いじめの重大性が高いと参加者が評価していることを示す。

結果

排斥想起と関係不安の影響

従属変数にいじめ評価、独立変数に想起条件と関係不安を用いて2要因の多変量分散分析を行った結果、交互作用が有意傾向となった ($F(2,82)=2.43$, $p=.09$, Wilks' Lambda=.94)。しかしながら、一変量分散分析の結果、交互作用は有意ではなかった。

排斥想起と親密性回避の影響

従属変数にいじめ評価、独立変数に想起条件と親密性回避を用いて2要因の多変量分散分析を行った結果、想起条件と親密性回避の交互作用が有意となった ($F(2,82)=4.43$, $p < .05$, Wilks' Lambda=.90)。一変量分散分析の結果、いじめによる社会的苦痛評価ならびにロジャーの行動による社会的苦痛評価のいずれにおいても交互作用が有意であった ($F(1,83)=5.48$, $p < .05$; $F(1,83)=7.47$, $p < .01$)。いじめによる社会的苦痛評価では、排斥想起群において、親密性回避の高い人の社会的苦痛評価が親密性回避の低い人のそれよりも低くなっていた ($F(1,83)=2.92$, $p < .10$; Figure 1)。また、親密性回避の高い人は、近いうちに大切なテストを受ける状況を想起した場合よりも、大切な人から拒絶・拒否された経験を想起した場合のほうが、社会的苦痛評価が低くなっていた ($F(1,83)=3.65$, $p < .10$; Figure 1)。ロジャーの行動による社会的苦痛評価では、排斥想起群において、親密性回避の高い人の社会的苦痛評価が親密性回避の低い人のそれよりも低くなっていた ($F(1,83)=5.23$, $p < .05$; Figure 2)。

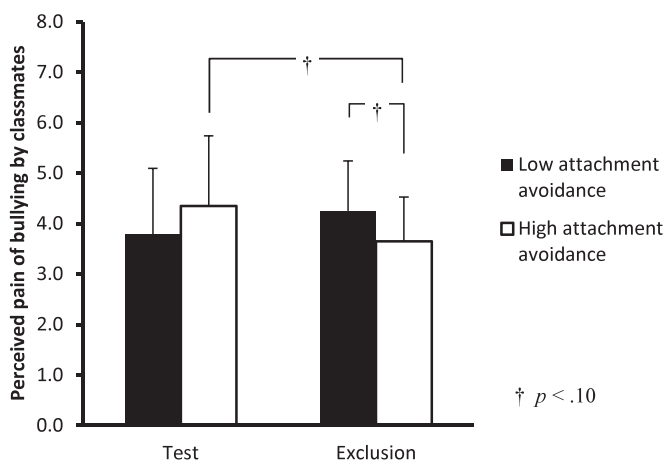


Figure 1 Perceived pain of bullying by classmates as a function of recalling condition and attachment avoidance.

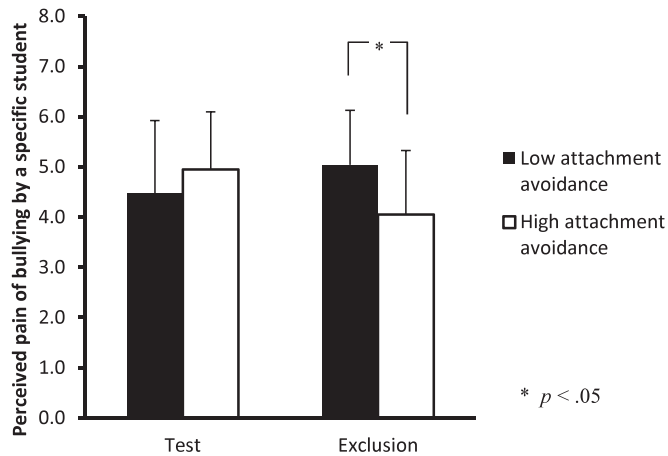


Figure 2 Perceived pain of bullying by a specific student who bullied severely as a function of recalling condition and attachment avoidance.

考 察

本研究では、成人愛着スタイルと排斥経験の想起がいじめ評価に及ぼす影響について、PC 端末で各想起条件の操作を行うことにより、伊崎他 (2013) の追試を行った。分析の結果、自分自身の過去の排斥経験を想起した上で、いじめを受けている子どもの社会的苦痛を評価した場合、親密性回避の低い人よりも高い人において、その評価が低くなっていた。こうした結果は、伊崎他 (2013) の結果と一致するものであり、親密性回避が高い人では、自分自身の過去の排斥経験を想起しても、他者の社会的苦痛に対する評価の歪みは修正されず、そのまま維持されることが再度確認された。

伊崎他 (2013) でも考察されているとおり、親密性回避の高い人は、アタッチメントシステムが活性化されないように、恐怖・不安・悲しみなどの感情を抑圧しようとする (Main & Weston, 1982)。そうした感情は、自分自身の弱さや感受性の高さを示すものであり、親密性回避の高い人が自分自身に対して抱く強さや独立性とは相反するものだからである (Cassidy, 1994)。こうした防衛メカニズムによって、親密性回避の高い人は、過去の排斥経験の想起により、社会的苦痛を自己生成することができず、むしろ、そうした感情をより一層抑圧してしまった可能性が高い。その結果、他者の経験する社会的苦痛を過小評価する傾向が修正されず維持されてしまったと考えられる。

本研究では、各想起条件の操作を PC 端末で行ったが、伊崎他 (2013) の結果と同様に、想起操作の有意な主効果は示されなかった。こうした結果は、過去のネガティブな社会的出来事を思い返すことによって生じる社会的苦痛の感情が、Cyber ball game を通じた実際の排斥経験によって生じる社会的苦痛の感情よりも、相対的に弱いことを示唆するものである。実際、Chen et al. (2008) は、過去に経験した親しい人からの裏切り行為につい

て、その直後に感じたであろう苦痛の程度よりも、その経験をあとから思い出している際に感じる苦痛の程度のほうが弱いことを明らかにしている。過去の排斥経験の想起では、経験される社会的苦痛の程度が相対的に弱いため、いじめの重大性に対する評価が高まりにくかったと考えられる。

引用文献

- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Bieri, D., Reeve, R., Champion, G. D., Addicoat, L., & Ziegler, J. (1990). The Face Pain Scale for the self-assessment of the severity of pain experienced by children: Development, initial validation, and preliminary investigation for ratio scale properties. *Pain*, **41**, 139-150.
- Cassidy, J. (1994). Emotion regulation: Influences of attachment relationships. *Monographs of the Society for Research in Child Development*, **59**, 228-283.
- Chen, Z., Williams, K. D., Fitness, J., & Newton, N. C. (2008). When hurt won't heal: Exploring the capacity to relive social pain. *Psychological Science*, **19**, 789-795.
- 伊崎 翼・谷口弘一 (2013). 成人愛着スタイルと社会的排斥 日本発達心理学会第24回大会発表論文集, 313.
- 伊崎 翼・谷口弘一・浦 光博 (2013). 成人愛着スタイルと排斥経験の想起がいじめ評価に及ぼす影響 日本グループ・ダイナミックス学会第60回大会発表論文集, 122-123.
- Izaki, T., Taniguchi, H., & Ura, M. (2013). Adult attachment style, social exclusion, and perception of pain from emotional bullying. *Collective abstracts of the 5th Asian Congress of Health Psychology*, 243.
- MacDonald, G. (2008). Use of pain threshold reports to satisfy social needs. *Pain Research and Management*, **13**, 309-319.
- Main, M., & Weston, D. R. (1982). Avoidance of the attachment figure in infancy: Descriptions and interpretations. In C. Parkers & J. Stevenson-Hinde (Eds.), *The place of attachment in human behavior*. New York: Basic Books. pp.31-59.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, **5**, 19-27.
- Mikulincer, M., & Shaver, P. R. (2007). *Attachment in adulthood: Structure, dynamics, and change*. New York: Guilford Press.
- Nordgren, L. F., Banas, K., & MacDonald, G. (2011). Empathy gaps for social pain: Why people underestimate the pain of social suffering. *Journal of Personality and Social Psychology*, **100**, 120-128.
- Rosenblatt, A., Greenberg, J., Solomon, S., Pyszczynski, T., & Lyon, D. (1989). Evidence for terror management theory: I. The effects of mortality salience on reactions to those who violate or uphold cultural values. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**,

681-690.

Williams, K. D., Cheung, C. K., & Choi, W. (2000). Cyberostracism: Effects of being ignored over the Internet. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**, 748-762.

Williams, K. D., & Sommer, K. L. (1997). Social ostracism by coworkers: Does rejection lead to social loafing or compensation? *Personality and Social Psychology Bulletin*, **23**, 693-706.

Williams, K. D., Yeager, D. S., Cheung, C. K. T., & Choi, W. (2012). *Cyberball 4.0* [Software].